準が社会的に比較的共通しているため、自己高揚的な認知が生じにくい。しかし平均は理論的中央値 5.5 を下回っていることから、現実の正確な認知を反映しているというよりも、自己卑下的な認知傾向を示した結果と言える。一方、「優しさ」や「まじめさ」といった性格特性は、その評価基準が曖昧であり主観的であることからも自己高揚的な認知を生じさせることが可能であるために、今回のような結果が得られたのかもしれない。

2．自尊感情

自尊感情を測定する尺度としては Rosenberg(1965)の自尊心尺度が一般に用いられる。この尺度は自分に対して「非常によい」とする評価と「これでよい」とする評価のうち、後者の自己受容的な評価を測定するものとされているが、項目自体は自分が肯定的な特性を持っているかどうかを尋ねることに限定されている。本研究では広い意味での自尊感情を調べることを目指して、自分自身に対する全体的な態度や評価を尋ねる 19 項目からなる尺度を構成した。

まず Rosenberg(1965)の自尊心尺度から中学生が回答することを考慮して適切だと考えられる６項目（項目番号１～６）を採択した。さらに「今の自分は本当の自分ではないような気がする」といった現実の自分に対する希薄な感覚を尋ねた３項目（項目番号 17 ～ 19）と、「自分のことが好きである」、「自分はかけがえのない人間だと思う」というより広い意味での自分を尊重する感情、評価を尋ねた２項目（項目番号７～８）を加えた。また青年期において、自分が思っている自分の姿と重要な他者が見ていると想像する自分の姿が異なっている場合には不適応感を生じさせると予想される。そこで他者から見た自分の姿が本来の自分とは違うと感じるずれの認識を調べるために、両親から見た自分と本当の自分とのずれについて尋ねる４項目（項目番号９～ 12）と、クラスの友人から見た自分と本当の自分のずれについて尋ねる４項目（項目番号 13 ～ 16）を作成した。これらの項目の内容は、「他者（両親ないし友人）といるときの自分は本当の自分ではないような気がする」、あるいは「他者（両親ないし友人）は本当の私の姿をわかっている」といった内容からなる。

（１）尺度の因子分析と下位尺度間の相関

上記の 19 項目について、主因子法バリマックス回転による因子分析を行った。固有値の変化と因子に含まれる項目のまとまり具合を参考にして、4 因子解を採用した。回転後の各項目の因子負荷量は表 3 のとおりである。

表3 自尊感情尺度の因子分析

番号	項　目	F1	F2	F3	F4
2	いろいろな良い素質をもっている	0.76			
1	少なくとも人なみには、価値のある人間である	0.74			
8	自分のことが好きである	0.73			
7	自分はかけがえのない人間だと思う	0.71			
4	だいたいにおいて、自分に満足している	0.59			
17	自分にはもっと別の可能性があると思う	0.49			0.49
3	自分には、自慢できるところがあまりない	−0.56			
14	クラスの友人と いるときの自分は、本当の自分ではないような気がする		0.82		
16	クラスの友人の前では、別の「自分」を演じている		0.81		
13	クラスの友人は、本当の私の姿をわかっている		−0.79		
15	クラスの友人に 対して、本当の自分を 出すことができる		−0.84		
10	両親といるときの自分は、本当の自分ではないような気がする			0.84	
12	両親の前では、別の「自分」を演じている			0.78	
9	両親は、本当の私の姿をわかっている			−0.76	
11	両親に対して、本当の自分を出すことができる			−0.84	
19	今とは違う「自分」になりたい				0.74
5	もっと自分自身を尊敬できるようになりたい				0.65
18	今の自分は本当の自分ではないような気がする				0.64
6	自分は全くだめな人間だと思うことがある				0.55
	説明率(%)	17.85	15.37	14.41	12.06

注1)因子負荷量0. 4以上を記載
注2)番号は質問紙のなかでの項目の順番を示す

第 1 因子は Rosenberg(1965)の自尊心尺度の「いろいろな良い素質をもっている」という項目や、独自に加えた「自分のことが好きである」という項目が高い負荷量を持っている。そこでこの因子を「自己肯定感情」と呼ぶこととする。第 2 因子は「クラスの友人といるときの自分は、本当の自分ではないような気がする」といったクラスの友人から見た自分と自分が思っている本当の自分とのずれの感覚を尋ねた項目が高い負荷量を持っている。そこでこの因子を「友人に対する偽りの自己の感覚」と呼ぶこととする。第 3 因子は第 2 因子と同様に両親から見た自分と自分が思っている本当の自分とのずれの感覚を尋ねた項目が高い負荷量を持っている。そこでこの因子を

「両親に対する偽りの自己の感覚」と呼ぶこととする。第４因子は Rosenberg の自尊心尺度の「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」という項目や、独自に加えた「今とは違う『自分』になりたい」という項目が高い負荷量を持っている。そこでこの因子を「自己改善願望」と呼ぶこととする。

第２因子と第３因子の「偽りの自己の感覚」は、一般に心理的な不健康や不適応感と結びつくと考えられる。また第４因子の「自己改善願望」に含まれる項目は、Rosenberg の自尊心尺度の因子分析においては負の負荷量を持ち、逆転項目として採用されているものである。

第１因子と第４因子に共に負荷量が高かった 17 番の項目を除いて、各因子に負荷量が高い項目の評定を合計して、そのまま下位尺度の得点として分析を行った。４つの下位尺度得点間の相関係数は表４のとおりである。２つの「偽りの自己の感覚」と「自己改善願望」の間には正の相関が認められ、これら３つと「自己肯定感情」との間にはそれぞれ負の相関が認められた。しかしいずれも、相関係数は大きいものではなかった。また２つの「偽りの自己の感覚」のうち、「友人に対する偽りの自己の感覚」の方が、「両親に対する偽りの自己の感覚」より、「自己肯定感情」や「自己改善願望」との相関が高かった。この結果は、児童期から青年期にかけて青少年の重要な人間関係が両親との関係から友人との関係へと移行していき、この友人関係のあり方が自己概念に重大な影響を及ぼすという見方と合致するものである。

表4　下位尺度間の相関

	自己肯定	偽り友人	偽り両親	自己改善
自己肯定		−0.26	−0.13	−0.24
偽り友人			0.23	0.29
偽り両親				0.15

注)「偽り友人」…友人に対する偽りの自己の感覚
「偽り両親」…両親に対する偽りの自己の感覚

（２）学年、性別、行為・経験による自尊感情

自尊感情の４つの下位尺度に対して、４（学年）×２（性別）×３（被験者の行為・経験）の分散分析を行った（表５）。

表5　自尊感情の下位尺度

		自己肯定	偽り友人	偽り両親	自己改善
中学1年生		17.75	9.31 b	9.45	11.86 b
中学3年生		17.84	10.72 a	10.65	13.06 a
高校2年生		16.84	11.08 a	10.03	13.06 a
大学1年生		17.91	11.45 a	10.34	12.65ab
	F値	2.47	10.46＊＊	2.37	4.02＊
男性		17.71	11.10	10.64	12.55
女性		17.29	10.66	9.61	12.93
	F値	2.65	2.04	15.73＊＊	3.41
不良行為	少	17.19	11.42	9.63 b	12.55
	中	17.42	10.79	10.03 b	12.81
	多	17.92	10.48	10.79 a	12.82
	F値	2.09	3.84	7.09＊＊	0.70
犯罪行為	無	17.64	10.83	10.02	12.57 b
	少	17.26	11.02	10.55	13.08ab
	多	16.96	11.44	10.96	13.96 a
	F値	0.59	0.67	1.08	4.81＊
被害体験	無	17.50	11.01	10.09	12.49 b
	少	17.32	10.81	10.61	13.09ab
	多	18.34	10.38	9.86	13.97 a
	F値	3.40	0.38	2.71	7.46＊＊
被害不安	低	17.64	10.61	10.14	12.20 b
	中	17.35	10.93	10.12	12.66 b
	高	17.65	11.17	10.34	13.40 a
	F値	1.23	1.43	0.19	9.22＊＊

注1)＊＊……0.1%水準で有意　＊……1%水準で有意
注2)異なる小文字の数値どうしはscheffeの多重比較の結果、5%水準で有意差が認められた

a 学年、性別ごとの自尊感情

学年の主効果は、「友人に対する偽りの自己の感覚」と「自己改善願望」において認められた。「自己改善願望」は中学１年生では低いが、中学３年生、高校２年生で高くなった後、大学１年生で再び低くなる傾向が認められた（図７）。有意には至らなかったが「自己肯定感情」においても、高校２年生で最も低くなっており、いずれも青年期において自尊感情が一時的に低下した後、青年後期で再び上昇するという逆U字型の変化が起こることを示唆する。

また「友人に対する偽りの自己の感覚」は中学１年生では意識されておらず、中学３年以降で高くなる。「偽りの自己の感覚」の２つの下位尺度の項目は、友人と両親という異なる対象に対して同じ内容を尋ねているために、尺度得点を直接比較することが可能である。平均点を単純に比較すると、中学生においては両者の差は小さいが、高校生以降で、特に友人に対して本来の自分を表出していないという感覚を持つことが推測される。この結果は先の「自己評価」の項で述べられた「社交性」の自己評価

の低下と対応している。

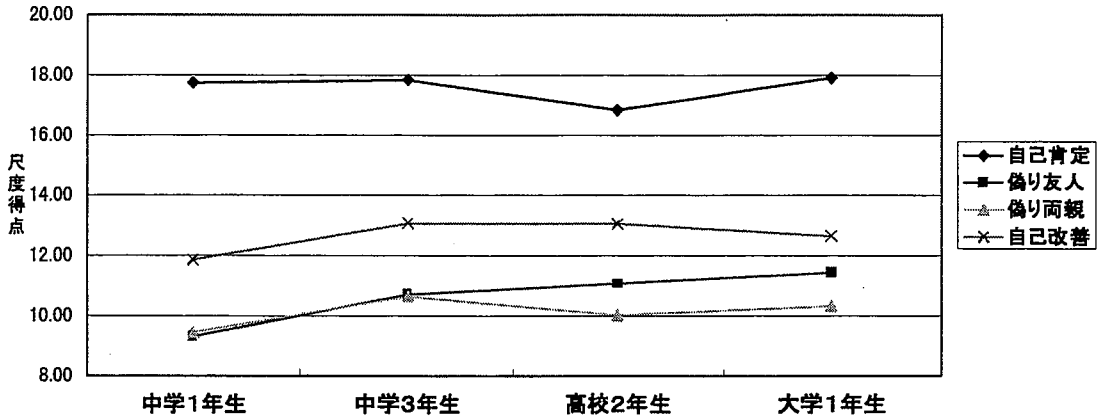

図7　学年別の自尊感情の下位尺度

性別の主効果は「両親に対する偽りの自己の感覚」において認められ、男性の方が両親が見ている自分と本来の自分の間にずれを感じている。男性では青年期において両親との関係が否定的になりやすい可能性を示唆している。

これまでの大学生を被験者とした研究では、一般に男性の方が女性よりも高い自尊感情を保持していることが確認されてきた。しかし本研究では「自己肯定感情」、「自己改善願望」のいずれも性差は認められなかった。自尊感情尺度の各項目の性差を学年ごとに調べたが、中学１年生で項目２（$t(137)=2.70, p<.01$；男性 3.21　女性 2.77），項目４（$t(137)=2.72, p<.01$；男性 2.95　女性 2.46），項目６（$t(138)=-3.27, p<.01$；男性 2.57　女性 3.26）、中学３年生で項目２（$t(135)=2.70, p<.01$；男性 3.27　女性 2.78）、高校２年生で項目 11（$t(319)=-4.13, p<.001$；男性 3.05　女性 3.60）、項目 12（$t(317)=2.77, p<.01$；男性 2.24　女性 1.91）、項目 16（$t(319)=2.92, p<.01$；男性 2.5　女性 2.2）、大学１年生では性差がある項目は認められなかった。中学１年生と３年生で有意になった項目はいずれも Rosenberg の自尊心尺度の項目であり、男性が女性よりも肯定的であった。しかし高校２年生で有意になった項目は「偽りの自己の感覚」であり、男性が女性よりもそのような感覚を保持していることを示している。大学１年生では性差のある項目が認められなかったが、その理由については明らかではない。

b 行為・体験による自尊感情

不良行為の主効果は「両親に対する偽りの自己の感覚」において認められ、不良行

為の経験が多い被験者は経験が中程度もしくは少ない被験者と比べて、両親が見ている自分と本来の自分の間にずれを感じていた（図８）。不良行為の経験の多い被験者は、両親との十分なコミュニケーションがとれておらず、両親に対して本当の自分を見せていない、あるいは両親が本当の自分を理解してくれていないという感覚を持っているのかもしれない。一方、有意には至っていないが「友人に対する偽りの自己の感覚」においても不良行為の傾向差が認められたが（$F(2,878)=3.84, p<.05$）、不良行為の経験が少ない被験者の方が多い被験者よりも、友人が見ている自分と本来の自分の間にずれを感じていた。「自己評価」の項でも不良行為の経験の多い被験者が「社交性」の自己評価が高いことが報告されたが、この結果と対応している。２つの「偽りの自己の感覚」の平均値を比較すると、不良行為の経験が多い被験者は両親に対して、不良行為の経験が少ない被験者は友人に対して偽りの自己を感じていた。

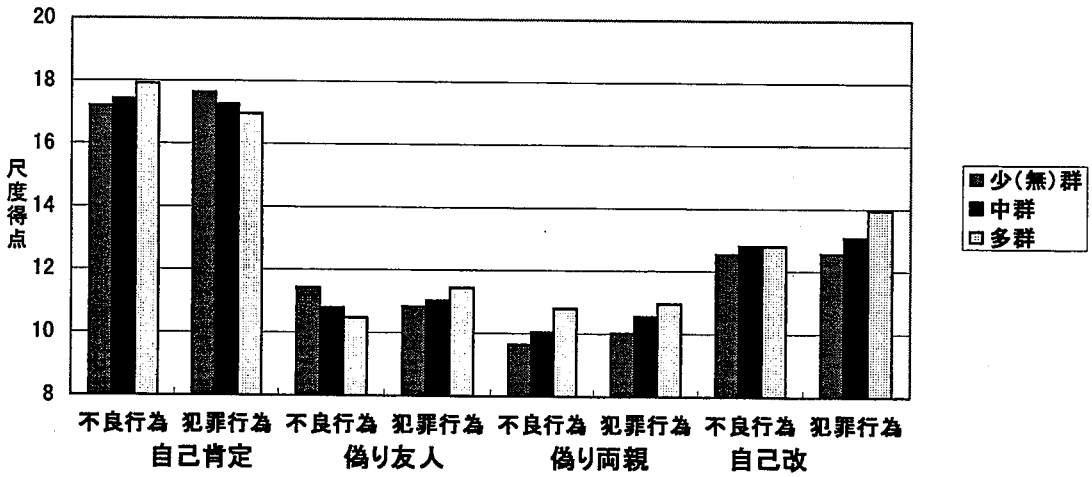

図8 不良行為・犯罪行為による自尊感情

一方、犯罪行為の経験の主効果は２つの「偽りの自己の感覚」で有意に至らなかったが、平均値を見ると「友人に対する偽りの感覚」は経験の多い被験者の平均値が高くなっており、不良行為の経験の効果とは逆の結果であった。また犯罪行為の主効果は「自己改善願望」で認められ、犯罪行為の経験が多い被験者ほど自分を変えたいという願望が強かった。

被害体験、被害不安の主効果も「自己改善願望」で認められ、被害体験の多い被験者、被害不安の多い被験者で願望が強かった。これ以外の主効果および２次以上の交互作用は認められなかった。

学年、性別ごとに、被験者の行為・体験と自尊感情の下位尺度との相関を調べた（表6）。「自己肯定感情」は中学１年生の女性と中学３年生の犯罪行為と負の相関が認められたが、他の被験者の行為・体験に影響を及ぼしていない。「自己改善感情」は中学１年生、中学３年生の逸脱行為、被害体験、被害不安と正の相関が認められたが、それより上の学年では相関が認められなかった。「両親に対する偽りの自己の感情」は中学１年、中学３年の主に逸脱行為と正の相関が認められたが、それより上の学年ではほとんど相関が認められなかった。「友人に対する偽りの自己の感情」は大学１年生の男性の不良行為と負の相関が認められたが、他との相関は認められなかった。

表6　自尊感情の下位尺度と被験者の行為・体験との相関

		男性				女性			
		不良行為	犯罪行為	被害体験	被害不安	不良行為	犯罪行為	被害体験	被害不安
中学1年	自己肯定	0.07	0.05	0.02	−0.02	−0.17	−0.27	−0.03	0.02
	偽り友人	0.10	0.01	0.12	0.08	−0.11	0.08	0.06	−0.05
	偽り両親	0.17	0.07	−0.01	−0.04	0.14	0.44	0.13	−0.09
	自己改善	0.18	0.04	0.46	0.29	0.25	0.31	0.11	0.24
中学3年	自己肯定	−0.01	−0.17	0.01	−0.06	−0.15	−0.21	0.08	0.02
	偽り友人	0.02	0.13	−0.04	0.11	−0.06	0.12	0.11	0.06
	偽り両親	0.29	0.25	0.27	0.03	0.16	0.11	−0.04	−0.06
	自己改善	0.13	0.22	0.12	0.31	0.22	0.36	0.25	0.24
高校2年	自己肯定	0.14	−0.09	0.12	0.11	0.03	0.10	0.00	−0.04
	偽り友人	−0.14	−0.02	−0.11	0.03	−0.13	−0.11	−0.13	−0.03
	偽り両親	0.04	0.01	0.10	−0.01	0.05	−0.07	0.05	0.10
	自己改善	−0.04	0.08	−0.03	0.03	0.08	−0.03	0.14	0.14
大学1年	自己肯定	0.18	−0.04	0.16	−0.04	0.12	0.21	0.09	0.06
	偽り友人	−0.20	0.08	0.06	0.12	0.00	0.08	−0.02	0.06
	偽り両親	0.06	0.05	−0.01	0.16	0.19	−0.04	−0.08	−0.01
	自己改善	−0.05	0.04	0.01	0.10	0.02	0.04	0.15	0.08

一般に自尊心を高めることは青年が不良行為や犯罪行為を犯すことを防ぐ方法と言われるが、本研究では「自己肯定感情」と逸脱行為の明白な関係は見いだされなかった。また青年期前期においては、両親との関係が不良行為、犯罪行為に影響を及ぼす可能性がある。友人との関係は、不良行為、犯罪行為に直接的影響を及ぼすかどうか明確ではない。

３．自尊感情と個別領域の自己評価の関係

不良行為経験の高さによって個別領域の重要性には差異があったが、一般に自尊感情は重要な領域の自己評価と密接に結びついていると考えられる。これを確認するために、不良行為の経験の多少ごとに自尊感情の下位尺度と個別領域の自己評価の相関